流域連携活動の近年の動向
— 淀川左岸地域を中心として —[1]
Recent Trend of River Basin Network Activities
- Case Studies in the Left Bank Area of the Yodo River -

石田裕子[2]　摂南大学理工学部都市環境工学科
ISHIDA, Yuko　Department of Civil and Environmental, Faculty of Science and Engineering, Setsunan University

Abstract

River and waterside restorations have been implemented by a collaboration between local government and citizens since 2001 in the left bank area of the Yodo River. Three sites of the Neya River were restored including "Neyagawa Seseragi Park" by the Restoration Workshop of the Neya River. Many kinds of freshwater fish and aquatic macroinvertebrates inhabit, and children play in, these restored sites. "Neyagawa Mizube Club", was established as a citizen volunteer group which handles maintenance of restored sites of rivers and irrigation canals in Neyagawa City. The club had a problem of aging, because it had been 15 years since the club was established. After that, young people such as junior high and high school students joined the club, and they are active in civil engineering works by citizens. "Neyagawa Youth Net", a group of university students and junior high and high school students in Neyagawa City, was organized in 2015. Young people of the Net are expected to be the center of river basin network activities. A waterside restoration project for improving access for people, and habitats for organisms will be planned in the Shimeno district in the Yodo River. If the project is accomplished, river basin network activities in the left bank area of the Yodo River will become more and more active.

キーワード:　行政と市民の協働，寝屋川再生ワークショップ，寝屋川ユースネット，河川・水辺の自然再生，市民土木工事

Keywords : cooperation between government and citizen, restoration

---

[1]【原稿受付】2017 年 9 月 6 日，【掲載決定】2017 年 10 月 3 日

[2]【主著者連絡先】石田　裕子　　摂南大学，准教授　　e-mail: ishida@civ.setsunan.ac.jp
〒572-8508　大阪府寝屋川市池田中町 17-8，摂南大学理工学部 都市環境工学科

workshop of Neya River, Neyagawa Youth Net, restoration of river and waterside, civil engineering work by citizen

1. はじめに

著者らのグループは，これまで淀川左岸地域における水環境再生の動きについて，特に行政と市民の協働，行政界を超えた地域連携に着目して報告してきた[1], [2].

これまでの報告から数年が経ち，淀川左岸地域で新たな取り組みが進んできたので，近年の動向について報告する.

2. 寝屋川再生ワークショップによる水辺整備について

大阪東部を流れる寝屋川流域は，流域面積267.6km^{2}の大部分が低平地であり，約4分の3の地域が雨水が自然に河川に流れ込まない内水域となっている[3]. そのため，1972年の大東水害を始めとして度々内水氾濫による浸水被害が発生しており，今でも水害危険度の高い地域となっている. 河川管理者である大阪府は，これまで河道改修を始めとして治水対策を積極的に進めてきた. そのため，寝屋川流域は以前よりも水害の心配はなくなったが，JR住道駅付近の区間に見られるように，高い鋼矢板護岸やコンクリート護岸，フェンス等で覆われ，人が近づけない川となった（図1）. 高度経済成長期には河川の水質汚染が進み，ゴミが捨てられ，人の関心が河川から離れていった.

図1　JR住道駅前の一級河川寝屋川

寝屋川再生ワークショップは，2001年に寝屋川市の市制50周年を契機として寝屋川再生プランを策定することを目的として始まった. 公募委員30名を募集したところ，61名が応募し全員を公募委員として任命し，市と協働して市内中心部を流れる寝屋川本川で重点整備箇所を4箇所選定し，整備のイメージづくりをおこなった[4].

寝屋川再生ワークショップにおける1箇所目の京阪寝屋川市駅前の整備では，京阪電車の線路の高架化に合わせて整備する機会が得られた. 市の玄関口としてふさわしいものにするため，ワークショップの中で基本設計から実施設計，工事施工段階まで大阪府や寝屋川市と議論した. 3年間の議論を経て，「寝屋川せせらぎ公園」は2005年に完成した. この区間は淀川からの浄化用水が最大10m^3/s，年平均にすると0.5 m^3/s程度が流入しており流速が大きいため，人が容易に入って遊ぶことはできない. その代わり，ウッドデッキや沈下橋を設置し人が水辺に近づけるようにした. また，

イベント時に利用できる階段式の舟着き場を設置し，毎年舟下りのイベントをおこなっている．この舟着き場は「ねやがわ元気みなと」と名付けられた．空石積み護岸の隙間からは自然に植物が生え，法面にはワークショップで選定した寝屋川源流域に元々生育している樹木等を植栽し，景観上も配慮されたものとなっている（図2）．

次に寝屋川本川で整備されたのは，せせらぎ公園から約1km上流の「幸町公園」（2009年）である（図3）．ここは，大阪府営団地の建て替えに合わせて，隣接する都市計画公園を整備する際に，川へ降りられる階段を整備した．ここは寝屋川せせらぎ公園と違い，河道が広く，流量が少ないため，子どもの膝くらいの水深しかなく，安全に遊ぶことができる．幸町公園の整備に関するワークショップが始まる前から，子どもたちや地域の人々と生きもの調査や河川清掃をおこない，ワークショップでは地元住民，地域の子どもたち，隣接する大阪府立工業高等専門学校（当時）の教員や学生も加わり，市民活動団体と地元住民の連携が取られた．整備後も夏場を中心に遊ぶ子どもたちの姿が見られる．

図2　寝屋川せせらぎ公園

図3　幸町公園

3箇所目の整備は，幸町公園から800mほど上流にある「川勝水辺ひろば」である（2013年）．この区間は寝屋川市内の寝屋川本川で最も河川区域の幅が広いものの，高い護岸とフェンスがあり，河川清掃の際には歩道から梯子を下ろして無理やり入らないとできないような場所であった．この地区の整備では，誰でも水辺に近づけるように車椅子やベビーカーが通れる幅のスロープを設置した．水生生物の生息環境となるよう瀬や淵，ワンド*を整備した．また，落差工の部分には，生物の移動ができるよう魚道を設置した．ただし，これらの生物のための整備は，必ずしもうまくいっているとは言えず，大雨の後にワンドが土砂で埋まってしまったことがあった．これらの環境については，引き続き維持管理をおこなっていく必要がある．幸町公園とは違って，川勝のワークショップには地元自治会が関わってくれたものの，整備後の利用には積極的ではなく，現在のところ利用者が少ないという課題がある．これについては，河川管理者である大阪府枚方土木事務所と地元への働きかけについて継続的に協議しているところである．

4箇所目の候補地は，寝屋川市公園墓地付近の寝屋地区である．ここは，たち川と北谷川が合流し一級河川寝屋川となる起点である．この地区の整備については，具体的な動きは出ていないが，

---

* ワンド：本流と接続した流れの緩い水域．生物の産卵場所や成育場所となる．

ワークショップの中では引き続き候補地として整備の機会を待っているところである.

以上に述べた寝屋川本川の整備の他，ワークショップではこれまでに市内水路やため池の環境整備や保全活動を精力的に進めてきた．川の整備の提案にとどまらず，まち全体を視野に入れて川を活かしたまちづくりを進めることを志向した．これらの水辺整備に関する行政と市民の協働の取り組みが高く評価され，第10回日本水大賞国土交通大臣賞や土木学会関西支部市民土木大賞“市民と歩む土木の業績部門”を始めとして，多くの賞を受賞している．2001年から始まった寝屋川再生ワークショップは，2017年現在まで途切れることなく継続しており，寝屋川市内の水辺整備に大きく貢献している.

3．市民団体「ねや川水辺クラブ」の発足と活動

寝屋川再生ワークショップは，2001年に行政が招集して始まり，市民によるまちづくり計画「寝屋川再生プラン」が策定され，市内各地で水辺整備を提案してきた．通常，整備後の維持管理や活用については，行政頼みになることが多いが，2001年度のワークショップの中で，各市民委員の思いは，プラン作成にとどまらず，多くの市民と活動を進め，寝屋川再生の機運の醸成と市民合意を図っていくために自ら行動を起こそうという話に結びついた．その結果，ワークショップでの話し合いを経て，一級河川寝屋川の再生に向けて具体的な活動をおこなうボランティア団体として，2002年に「ねや川水辺クラブ」が誕生した(4).

ねや川水辺クラブは，親水，環境，清掃，歴史・文化の4つの部会を設けて活動している．河川清掃，市内河川・水路の生きもの調査，Eボート*を使った川下り，川づくり土木作業や寝屋川源流域でのハイキングや間伐，炭焼きなど多彩な活動をおこなっている．特に，寝屋川再生ワークショップの委員参加，クリーンリバー寝屋川作戦実行委員会，市内各地の川づくり土木作業，小学校の総合学習の支援などの中心メンバーとして活躍している.

クリーンリバー寝屋川作戦は，毎年春と秋の2回，寝屋川市内の一級河川寝屋川沿い12箇所で河川清掃をおこなっている．2001年の開始当初は約30人の参加であったが，今では1日当たり約400人の参加がある．地域住民の他，市内2大学・高専（摂南大学，大阪府立大学工業高等専門学校，大阪電気通信大学）や市内企業も参加し，活動が定着している．この実行委員会はねや川水辺クラブや摂南大学の学生が中心となっており，準備から当日の実施，後片付けまでを担っている.

さらには，2005年に完成した寝屋川せせらぎ公園の植生モニタリングや清掃などの維持管理も，当初からプロポーザル方式で寝屋川市から受託し，週4日，年間200日の定期的な管理をおこなっている．活動場所は寝屋川本川にとどまらず，市内小学校のビオトープ整備や，淀川からの用水樋跡を遺構として市民工事で里川に復元した「茨田樋遺跡水辺公園」（2007年完成，図4）の整備など，活動範囲は淀川左岸地域に広がっている．特に，茨田樋遺跡水辺公園の整備に関しては，工事施工段階において行政の工事4割，市民工事6割でおこない，市民による土木工事という手法を切り拓いた．完成後，毎年11月23日には茨田イチョウまつりを開催している．京街道沿いにあるこの公園には，明治期に植えられたイチョウの大木があり，この木から採れるギンナンや小学校で育てた食材，行政の提供する災害用非常食などを味わいながら，Eボートも運航し，地域住民と市民

---

* Eボート：10人乗りのゴムボート．Eの文字には，Enjoy, Entertainment, Environment, Ecology, Easy, Exciting等の意味が込められている.

が交流する機会を設けている.

図4　茨田樋遺跡水辺公園

4．淀川左岸地域における流域連携シンポジウムの開催

寝屋川再生ワークショップ，ねや川水辺クラブに加えて，淀川左岸域での活動には淀川愛好会の存在も大きい．淀川愛好会は，摂南大学理工学部都市環境工学科（発足当時は工学部都市環境システム工学科）に事務局を置き，1997 年に設立された市民団体である．淀川をより深く知り，親しみ，愛することを通じて，会員相互の親睦と地域社会への貢献を図ることを目的としている．大きな活動として，1999 年から夏に近畿水環境交流会（当初から 2004 年までは淀川流域水環境交流会）を開催し，「活かそう水辺，つなごう流れ」をキャッチフレーズとして，近畿地方の各地で場所を変えながら，シンポジウムとＥボート乗船からなる交流会を実施してきた.

淀川左岸地域では，2014 年 7 月 26 日（土）・27 日（日）に，「近畿水環境交流会 in 淀川・寝屋川市」として開催した．1 日目午前中の見学会では，寝屋川市内で 2001 年より進められてきた親水整備箇所の見学をおこなった．澤井健二摂南大学名誉教授の解説を聞きながら，寝屋川せせらぎ公園，幸町公園，川勝水辺ひろば，大阪府立環境農林水産総合研究所水生生物センター，淀川河川公園点野（しめの）地区，茨田樋遺跡水辺公園，点野流域センターを巡った．午後のシンポジウムは，摂南大学を会場として，今井光規学長（当時）の歓迎挨拶の後，（株）日建技術コンサルタント技術部長・元河川環境管理財団大阪事務所所長の田村公一氏による特別講演「淀川中流域の最近の状況」があった．2013 年 9 月の台風 18 号により，淀川流域においても各地で浸水被害があったことや，その当時河川管理者がどのような水位操作を各ダムでおこなっていたか等について紹介があった．また，近年進められている淀川河川公園の整備状況について説明があった．続いて，ねや川水辺クラブの上田豪氏による報告「寝屋川市における水辺再生」があり，その後，近畿圏内から集まった各参加団体の活動紹介があった．2 日目は，淀川点野地区を会場に，午前中は河川清掃，淀川まるごと体験会（ヨシ笛づくり，魚とり，防砂用土のうづくり体験等）をおこなった．午後は，淀川でＥボートレースをおこなった．二日間で 230 名を超える参加者があり，多くの市民・学生が近畿圏の流域連携を深めるいい機会となった.

2016 年 9 月 3 日（土）には，「第 16 回川に学ぶ体験活動全国大会 in 琵琶湖・淀川流域圏」が摂

南大学を会場におこなわれた（図 5）．川に学ぶ体験活動は，「川での活動を通じて，人間性の回復や水環境の保全についての認識を広げていく」ことを目的とし，また，子どもたちに「川の楽しさを伝え，川を大切にする気持ちを育て，人と人のつながりを創り，文化・社会を創造し，川の力・危険性を理解して安全への意識を高める」場として全国各地で実施されている[5]．2016 年は近畿圏で初めてとなる大会で，全国各地から 200 名を超える参加者があった．綾史郎大阪工業大学特任教授による基調講演「淀川生態環境の目指すもの」の後，全国から 5 団体の活動事例発表があった．その後，防災，環境，親水，文化，連携の 5 つの分科会に分かれ，各テーマについて討論がおこなわれた．再び全体会場で各分科会の報告があり，最後に，減災・環境保全・水難事故防止・川文化の再生・次世代への継承の 5 項目からなる大会宣言を採択して終了した．全体会場には，淀川河川敷から持ってきた植物やボートが飾られ，室内にいながらにして淀川を感じられるレイアウトとなった（図5）．

また，淀川愛好会では，毎年 2 月にその時々の関心の高い問題について議論する「淀川討論会」を開催している．2017 年 2 月の第 19 回淀川討論会は，河川協力団体近畿連絡会との共催で「近畿河川フォーラム」をおこなった．河川協力団体制度とは，自発的に河川の維持，河川環境の保全等に関する活動をおこなう NPO 等の民間団体を河川管理者が支援する制度で，2013 年に河川法の一部が改正され始まった[6]．指定を受けたい団体は，河川管理者に申請した後適正な審査の上，河川協力団体として指定される．2017 年 3 月 17 日時点では，国土交通大臣指定 243 団体，都道府県知事指定 5 団体の計 248 団体が指定されている．国土交通省近畿地方整備局管内においても，ねや川水辺クラブを始めとしていくつかの団体が指定を受けて活動している．「近畿河川フォーラム」では，河川協力団体全国協議会の動きや河川協力団体制度の現状についての報告，各河川協力団体の活動発表と意見交換がおこなわれた．河川協力団体の理念や内容に沿った活動を今後も継続しておこない地域づくりにつなげていくこと，河川事務所単位での情報共有が重要であること等の意見を踏まえ，継続的にフォーラムを開催することが決定された．次回開催予定は 2018 年 2 月であり，淀川左岸地域での流域連携活動の情報共有が期待される．

図5　第16回川に学ぶ体験活動全国大会

5．寝屋川ユースネットの設立による流域連携活動への若者の参画

これまで寝屋川市内の水辺の活動は，摂南大学の特定の研究室（水辺環境創出研究室，生態環

境学研究室）およびエコシビル部の学生が関わっていたものの，ねや川水辺クラブが中心となって活動していた．ねや川水辺クラブはこれまで精力的に活動してきたが，結成から15年が経ち，会員の高齢化が問題となっていた．そのような中，ねや川水辺クラブが環境学習の指導に入っていた市内の小学校の子どもが中学生になり，ねや川水辺クラブジュニア（正会員には高校生からしかなれないため）として活動することとなった．この時の中学生は1名だけであったが，その生徒が別の中学生を勧誘し，2名がジュニアとして活動に関わるようになった．その中学生がやがて高校生になり，水辺クラブの実働部隊として大いに活躍することになった．その間にさらに中学生1名が加わり，ジュニアは3名体制となった．これらのジュニアと摂南大学生ら若者の連携活動は，2011年ごろから始まった．

精力的に流域連携活動を進める摂南大学の学生であるが，クラブを引退・大学を卒業すると，活動に参加しなくなる問題があった．クラブを引退した学生たちは，それぞれ就職活動や卒業研究で忙しくなることもあるが，いちばんの理由は「引退したのに部活動に参加して，後輩に迷惑がられたくない」とのことである．実際にそのような意見が後輩から出たことは確認されていないが，毎年のように引退した学生がそのように発言したり，部活動に急に参加しなくなったりすることから，そのように感じている学生が少なからずいるのかもしれない．都市環境工学科のエコシビル部員の一部は，4年生で生態環境学研究室に所属すると，卒業（大学院生は修了）まで河川・水辺の環境保全・流域連携活動に関わることになる．また，エコシビル部経験者でなくても，研究室に所属し卒業研究で関わることができる．これらの学生は卒業研究・修士の研究でエコシビル部員よりも深く活動に関わるので，活動に対する理解度はエコシビル部員より高い場合がある．筆者が担当するPBLプロジェクト「寝屋川市における環境学習支援と淀川水系における流域連携プロジェクト」は2010年度から続いており，年によってはエコシビル部とも都市環境工学科ともそれまで関係のなかった他学部・他学科の学生が活動に参加することもある．これらのPBL学生は熱心に活動するが，履修の1年間が終了すると，新たなプロジェクトや活動に移っていくので，継続的な活動が期待できないといった問題がある．

寝屋川市内には摂南大学の他に，大阪府立大学工業高等専門学校（2011年から．以前の名称は大阪府立工業高等専門学校．通称・府大高専）と大阪電気通信大学（電通大）の2大学があり，これらの大学の市内の水辺活動への参画が課題となっていた．　府大高専には，市内から遠く離れた南大阪の河川の流域で里山保全活動に関わっている総合工学システム学科の鯵坂誠之准教授がおられたため，ねや川水辺クラブ有志が寝屋川市内での活動を呼びかけに行き，協働できる取り組みがあるかを探った．電通大には，2011年度に寝屋川再生ワークショップで電通大の近くにある寝屋川第11水路上流水路の整備の検討をおこなう際に，「研究支援室」という外部機関との共同研究の仲介をする部署を通じて，協力してくれる教員を探し声をかけた．これらの呼びかけに応じてくれた工学部環境科学科の高岡大造教授と話し合い（後に田中孝徳講師も参加），市民と各大学の協働について検討した．

こうした話し合いの結果，寝屋川ユースネットは2015年に設立された．ユースネットは寝屋川市内における若者による活動組織で，ねや川水辺クラブジュニア，摂南大学，府大高専，電通大の学生，またクラブや大学を卒業したOB・OGまでを対象としている．2大学・高専の他にも，これまで寝屋川再生ワークショップに参加した寝屋川市在住の他大学の学生も対象としているが，2大学・

高専以外の学生の参加は今のところない．2015年度は寝屋川せせらぎ公園の植生の維持管理作業を，ユースネットでおこなった．ユースネットとしての活動は多くないものの，クリーンリバー寝屋川作戦においては，水辺クラブジュニアが全体の統括，摂南大学が萱島信和町，電通大が寝屋川せせらぎ公園，府大高専が幸町公園をそれぞれ担当し，ゆるやかな連携をおこなっている．その他，淀川点野地区で毎月おこなわれている拠点整備活動もユースネットが積極的に関わっている．2大学・高専については，それぞれの専門性を活かした活動もおこなっており，毎年淀川点野地区でおこなわれる淀川まるごと体験会では，摂南大学がEボートを使った親水体験，府大高専が開発したキットを使用した浸水歩行訓練をおこなっている（図6）．電通大独自の取り組みはまだこれからであるが，河川敷の植物を利用した紙漉き体験プログラムを開発中である．

(a) Eボート運航

(b) 浸水歩行訓練の様子

図6　淀川まるごと体験会での学生企画

このように，現在の寝屋川市内の川づくりの主要な取り組みの主力は大学生・高校生が担っている．若者が川づくりに参画していくことで，作業自体の活動内容の幅が広がる．河川・水辺の活動が高齢化している昨今，寝屋川のように若者が参画していることは全国的にも珍しい．大学生にとっては，自分たちの専門の勉学に関連付けて作業ができるので，学生自身の関心や知識が広がるというメリットがある．ユースネットの一員として，学校ではうまく過ごせない高校生たちも，水辺での活動が生きがいや自分たちの居場所になって，大いに力を入れて活動に関わっている．これまでの市民活動が若者たちに継続され実行されていることが全国的にも評価され，2015年の第8回いい川・いい川づくりワークショップでは準グランプリを受賞した（図7）．受賞することが若者たちの励みになり，ますます活発な活動につながっている．

(a) 会場での発表の様子

(b) 出場メンバー

図7　第8回いい川・いい川づくりワークショップ

6．点野水辺プロジェクトの始動

寝屋川市内での活動は，一級河川寝屋川だけにとどまらず，淀川でもおこなっている．淀川・点野地区の点野砂州では，2006 年より河川レンジャーが中心となり水辺再生活動をおこなっている．点野砂州では，特に外来植物が問題となっており，繁殖力の強い外来植物によって在来植物の多様性が低下している．外来植物の駆除をおこなうことで，市民が気軽に近づける水辺空間を目指した活動がおこなわれている．毎月一回市民や学生がおこなう定例の点野拠点整備活動（図 8）の他，毎年夏の淀川まるごと体験会の実施や各市民団体による植物観察会等がおこなわれている．点野砂州は住宅地から近く，自然がたくさんあり，市民が水辺に親しむのに最適な場所である．また，管理道路が近く，通行人の目がいき届きやすいことから，事故等に気付ける位置にあり，安全面からも評価の高い場所である．しかし，管理道路のある高水敷から低水敷の砂州に降りるにはガードレールがあり，人が気軽に利用できないようになっている．

図 8　点野地区での拠点整備活動

淀川沿いには，1972 年以来，30 年以上にわたって高水敷に河川公園が整備されてきた[7]．淀川河川公園基本計画は，1975 年に策定され，1979 年に改定された．公園基本計画の改定から 20 年以上が経ち，自然や歴史などの淀川らしさを活かした公園基本計画が必要とされた．2004 年より淀川河川公園基本計画改定委員会において，公園計画の改定について検討が重ねられ，一般の人々の意見も反映して，2008 年に公園基本計画が改定された．この計画に基づき，淀川を管理する国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所では，河川公園の再整備を進めることとなった．公園基本計画に基づき，淀川河川公園地域協議会が設置され，2013 年に点野地区が淀川管内で唯一の再整備のモデル地区に選定された．選定の理由は，長年にわたる活動の継続性と市民参画の実績が認められたことが大きい．モデル地区選定後，2014 年に市民ワークショップを 1 回おこなったが，その後行政の都合でしばらく開催されなかった．2016 年度から本格的に「点野の水辺づくりワークショップ」として，点野地区の整備の検討が始まった．人が点野砂州まで簡単に降りられるための高水敷の切り下げや，埋もれているワンドの再生等，市民からは環境保全と利用を両立させたいという意見が出ている．ワークショップと並行して，2016 年から「点野水辺プロジェクト」として，点野地区での活動を位置づけることとなった．点野水辺プロジェクトは，市民団体が提供する「水辺利用プログラム」の実施を通じて，地元住民が水辺の利用に熱心であること，関係者の連携による水辺の安全な利用ができることをアピールし，河川事業の対象候補地として，点野地区の優位性をアピールし，事業実施を強力に後押しすることを目標としている．4 月の淀川愛好会春のイベント「淀川・点野水辺のつどい」や，8 月の淀川まるごと体験会が点野水辺プロジェクトに位置付けられている．

2017年度もワークショップは継続している．2017年8月4日（金）に開催された第1回ワークショップでは，行政・市民・大学等が点野地区の図面を見ながら，今後の整備や実施したいイベントについて意見を出し合った（図9）．実際に，点野地区の整備が着工するのは2018年度以降となるが，淀川河川公園の再整備の象徴となるような計画・施工が期待される．

図9　2017年度第1回点野水辺ワークショップ

7．終わりに

淀川左岸地域では，2000年以降，全国的にも先進的な河川・水辺の整備や保全活動を，行政・市民・大学の協働でおこなってきた．これらの活動には，市民の絶え間ないボランティア活動と，大学を始めとした若者の力が欠かせない．淀川点野地区での再整備や，寝屋川再生ワークショップによる市内の水辺整備計画等，今後も整備の動きがある．引き続き摂南大学の学生たちと，市内の河川・水辺環境の整備・保全に貢献したいと考えている．

謝辞

本研究の内容は，これまで淀川左岸域での流域連携活動に尽力されてきた澤井健二摂南大学名誉教授，上田豪河川レンジャーアドバイザーを始めとした寝屋川再生ワークショップ委員のみなさまの成果に基づいています．また，活動の多くは，摂南大学理工学部都市環境工学科生態環境学研究室およびエコシビル部の学生の多大な貢献と，国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所，大阪府，寝屋川市の各行政機関のご理解の上に成り立っています．ここに記して謝意を表します．本研究の一部は，寝屋川市委託研究「寝屋川再生ワークショップに係る調査研究」によった．

参考文献

(1) 澤井健二，石田裕子，「環境用水創出のための行政界を超えた新たな地域連携－淀川左岸地域を事例として－」，環境技術，37-10(2008), pp.705-709.

(2) 澤井健二，石田裕子，「環境用水の創出に向けた地域的な取り組み―淀川左岸地域における取り組みの検証―」，環境技術，39-12(2010), pp.8-14.

(3)「淀川水系寝屋川ブロック河川整備計画」，http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/4127/00011399/kasenseibikeikaku(neyagawa).pdf，(2017年8月1日閲覧).

(4) 上田豪，上野裕士，「11 章　水辺整備計画と住民活動：淀川左岸の事例から」，秋山道雄，澤井健二，三野徹　編著，「環境用水－その成立条件と持続可能性」，技報堂出版，(2012).
(5) 「NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会ホームページ」，http://www.rac.gr.jp/03zenkoku/index.html, (2017 年 8 月 1 日閲覧).
(6) 「河川協力団体制度」，http://www.mlit.go.jp/river/kankyo/rcg/index.html, (2017 年 8 月 1 日閲覧).
(7) 「淀川河川公園基本計画について」，http://www.yodogawa.kkr.mlit.go.jp/activity/comit/plan/basic/index.html,　(2017 年 9 月 1 日閲覧)．